PANORAMA SCHOLARLY GROUP

Three Teachings Studies

Confucianism, Daoism, and Buddhism



知行の彼岸——日本における陽明心学の受容と再構築

Beyond Knowledge and Action: The Reception and Reconstruction of Yangming Philosophy in Japan

陳放（Chen Fang） [a, *]

[a] 亜細亜大学，日本（*Asia University, Japan*）

ARTICLE INFO

Keywords:
Wang Yangming's Philosophy
Japanese Yangming Studies
Unity of Knowledge and Action
Innate Knowledge, Bushidō, Shintō
Philosophy of Action
陽明心学
日本陽明学
知行合一
致良知
武士道
神道
行動の哲学

DOI: *https://doi.org/10.63802/tts.v1.i1.122*

ABSTRACT

English
This study examines the process through which Wang Yangming's philosophy, originating in Ming China, was transmitted to Japan and reconstructed as a unique "philosophy of action." The research first traces the genealogy of practice in Japanese Yangming Studies, focusing on the contributions of three representative thinkers—Nakae Tōju, Kumazawa Banzan, and Ōshio Heihachirō—who expanded its application from personal ethics to political reform and revolutionary action. It then analyzes the distinctive features of Japanese Yangming Studies: the emphasis on practical ethics over speculative thought, its integration with indigenous values such as Shintō and Bushidō, and its dynamic relationship of opposition and synthesis with Zhu Xi's Neo-Confucianism. Furthermore, the principles of "the unity of knowledge and action" (知行合一) and "innate knowledge" (致良知) remain significant for addressing the contemporary problem of the gap between knowledge and practice. Through this analysis, the study demonstrates that Japanese Yangming Studies not only exemplifies the localization and creative transformation of an imported philosophy but also retains universal value as an ethical guide in the modern world.

日本語
本研究は、中国で誕生した陽明心学が日本に伝播し、独自の「行動の哲学」として展開された過程を考察するものである。まず、日本における受容の初期段階において、中江藤樹・熊沢蕃山・大塩平八郎といった思想家が、それぞれ個人倫理・政治改革・革命的行動へと実践領域を拡張した系譜を明らかにした。次に、日本陽明学の特質として、思弁よりも実践倫理を重視する傾向、神道や武士道との融合、そして朱子学との対立および折衷を整理した。さらに、陽明学の「知行合一」や「致良知」の理念は、知識と行動の乖離という問題を克服しようとする点で、現代社会にも重要な示唆を与える。以上の分析を通じて、日本陽明学は異文化思想の在地化と創造的転用の典型例であると同時に、現代においても有効な行動規範を提供し得る普遍的価値を持つことが明らかとなった。

* Corresponding author. e-mail: a125323@asia-u.ac.jp

1. 序論——陽明心学の基本概念と日本への伝播

陽明心学は、中国明代の思想家・王陽明（王守仁）によって創始された儒学の一派である。その核心理念は、知識偏重の学問態度や、知識と行動の乖離を否定し、個人の内面に根ざした道徳的実践を重視する点にある。この哲学の中核をなすのが、「致良知」と「知行合一」という二つの概念である。陽明は、人間の心が本来的に有する善を「理」と見なし、道徳的原理は外在的に求めるものではなく、心の内にこそ存在するとする「心即理」の立場に立った。この「心」の働きを重視する姿勢は、各人が自らの内なる声に従って倫理的実践を成し得るという主体性を強調するものであった。

この思想は、当時の主流であった朱子学とは根本的に異なっている。朱子学が事物に内在する理を外的に探究する「格物窮理」を修養の起点としたのに対し、陽明は知識と実践を不可分のものとする「知行合一」を唱えた。すなわち、知識のみを有して実践を伴わないことは無意味であり、真の知とは必然的に行動を伴うという認識である。さらに、陽明は朱子学における「格物致知」を再解釈し、事物の理を外に求めるのではなく、自身の心に内在する「良知」を発揮し意志を正すことこそが、真の「格物致知」であると説いた。この内面的修養論への転換は、陽明が若年期に竹の理を窮めようとして挫折した実存的経験に由来しており、彼の思想は単なる理論ではなく、その生き様に深く根ざしていた。このような「実存的リアリティ」は、後世の日本における知識人や志士たちの共鳴を呼び起こす土壌を形成したと考えられる。

陽明学は、江戸幕府が朱子学を官学として推奨する中にあって、一種の思想的対抗軸として日本に伝来した。朱子学が厳格な身分秩序と体系的な理論構築を重視したのに対し、陽明学は個人の内面に根ざす実践倫理を掲げ、既存の秩序に批判的で革新的な思想として受け止められた。日本における陽明学の本格的な受容は、中江藤樹（1608–1648）を嚆矢とする。彼は朱子学の外面的規範に対して疑問を抱き、内面的誠意を重んじる陽明心学に深く共鳴した。

本研究は、陽明学が日本に伝来した際の政治的・文化的背景に着目し、その思想的特質がいかにして日本独自の受容を経て、中国本土とは異なる「日本陽明学」を形成したのかを考察する。特に、思弁にとどまらず実践に直結する「行動の哲学」としての機能に焦点を当て、代表的な三名の思想家と日本的文化価値との相関を通じて、その特質を多角的に分析する。以下にその基礎的視座として、朱子学と陽明学の主要概念を比較する表を提示する。

表 1：朱子学と陽明学の主要概念比較

比較項目	朱子学	陽明学
創始者	朱熹	王陽明（王守仁）
中心概念	性即理、理気二元論	心即理、知行合一、致良知
修養方法	居敬窮理、格物致知を重視	心の働きを重視、静坐・省察など
実践観	知識の獲得が道徳修養に不可欠（知先行後）	知識と行動の一致が最重要（知行合一）
「理」の所在	自己の外にある事物の中に存在するとする	内なる心の中に内在するとする

2. 日本陽明学の黎明——三人の思想家に見る「実践」の系譜

日本における陽明学は、単なる学問的理論として受容されたのではなく、各思想家の社会的・政治的文脈に応じて、具体的な行動哲学へと展開された。本章では、中江藤樹・熊沢蕃山・大塩平八郎という三人の代表的思想家を取り上げ、陽明学の「実践」の系譜を詳細に追跡する。彼らの思想的営為は、個人倫理から政治、さらには革命的行動へと、実践領域を段階的に拡張させた歴史的過程を示している。

2.1. 中江藤樹——個人倫理と日常実践への昇華

日本陽明学の祖とされる中江藤樹は、朱子学の外面的規範に疑義を抱き、心を基盤とする実践を重視する陽明学に深く共鳴した。彼は、王陽明の思想を日本的歴史風土や政治体制に即して再解釈し、庶民にも理解・実践可能な形で提示した。

藤樹の思想の核心は、「致良知」の実践を家庭倫理へと具体化した点にある。彼は「良知」を、生得的に備わる「愛敬」（愛と敬いの心）と定義し、その心を日常的行動に反映させることを説いた。具体的には、「和やかな顔」「思いやりのある言葉」「相手を優しく見る」「心から話を聴く」「他者を思いやる」といった「五事を正す」を実践の要諦とした。抽象的理念を具体的倫理規範へと翻訳したこの試みは画期的であり、藤樹の教えは武士のみならず農民・商人にまで広がり、日本社会における陽明学の基盤を築いた。

2.2. 熊沢蕃山――政治倫理と社会改革への展開

中江藤樹の門人である熊沢蕃山は、師の思想を個人修養の域から政治・社会改革へと拡張した。彼は「致良知」の理念を治国の実践原理に応用し、治山治水など具体的な経世済民の施策に尽力した。その根底には、自然環境の保護を重視する「天人合一」の思想があり、無秩序な森林伐採や過度な新田開発を戒めた。

蕃山は「庶民の安寧こそ国家繁栄の基礎である」と主張し、社会制度の改善を求めた。その批判精神は『大学或問』などに結実し、幕府から危険視され幽閉されるに至った。蕃山の思想は、陽明学を個人倫理にとどめず、政治・社会変革を志向する理論的基盤へと昇華させた好例といえる。

2.3. 大塩平八郎――革命的行動としての知行合一

大塩平八郎は、日本陽明学史において最も急進的な実践者であり、独学によって陽明学を深く吸収した。彼の行動規範は、「知っていることは必ず行動に表れる」という「知行合一」の徹底にあった。

天保の大飢饉に際し、飢餓に苦しむ民衆と奉行所や豪商の不正を目撃した彼は、まず私財と蔵書を売却して救済に充てた。しかし改善が見られないと判断すると、自らに「知行合一を説く者として、今何をすべきか」と問い、最終的に武装蜂起という直接行動に踏み切った。この行為は、知識の実践を「義」のための革命的行動へと拡張し、体制の破壊をも辞さない思想的急進性を示したものであった。乱は短期間で鎮圧されたが、その衝撃は、陽明学が潜在的に有する批判精神と体制転覆の可能性を世に示した。

2.4. 比較分析――日本的「在地化」と実践拡張の系譜

以上の三人の思想家は、それぞれ異なる次元において陽明学を「在地化」した。すなわち、藤樹は家庭倫理に根差した日常実践へ、蕃山は経世済民を基調とする政治改革へ、大塩は革命的行動へと、それぞれ思想を展開した。

この系譜は、陽明学が個人の内面的修養にとどまらず、家庭倫理から藩政、さらに国家・社会全体へと実践領域を拡張していった歴史的プロセスを明確に物語る。日本における陽明学は単なる学派ではなく、各社会階層や時代的課題に応じて柔軟かつ創造的に再構築され、静から動へ、内から外へ、個人から社会へと展開していったのである。

表 2：日本陽明学の代表的思想家とその実践

思想家	陽明学の解釈	実践の対象・領域
中江藤樹	「致良知」＝「愛敬」の心	個人の日常倫理、家庭、庶民教育
熊沢蕃山	「致良知」＝政治の要諦	藩政改革、治山治水、経世済民
大塩平八郎	「知行合一」＝革命的行動	社会の不正・腐敗への批判、貧民救済、現体制への挑戦

3. 日本陽明学の特質——思弁を超えた「行動の哲学」

日本における陽明学は、その受容と展開において中国本土のそれとは異なる独自の特質を示した。本章では、特に顕著な特徴として、「思弁性よりも実践倫理を重視する傾向」と「日本固有の価値観との融合」に焦点を当て、日本陽明学がなぜ「行動の哲学」として機能したのかを多角的に分析する。

3.1. 思弁よりも実践倫理に重きを置いた受容

中国において、陽明学は朱子学に対抗する一学派として存在したが、その影響力は限定的であったと指摘されている。他方、日本では、陽明学は知識偏重で形骸化した朱子学に対する批判的思想として受容され、「知識を行動に結びつける哲学」、すなわち「行動の哲学」として強調された。

この傾向は特に幕末の志士たちに強い共感を呼び起こした。吉田松陰は、知識を蓄えるだけの「学者」になることを戒め、門下生に対して「実行こそ第一である」と説いた。彼の卓越した行動力は、まさに陽明学の「知行合一」を体現するものであり、社会変革を志す多くの青年たちに精神的支柱を与えた。日本において陽明学が「動」の思想として受容されたのは、その実践性が、既存秩序が揺らぎつつあった時代の要請と合致したためであると考えられる。

3.2. 日本的価値観との融合

陽明学が日本で独自の発展を遂げたもう一つの要因は、日本の固有の価値観、とりわけ神道や武士道との融合に成功した点にある。

3.2.1. 神道との融合

陽明学の「万物一体の仁」は、天地万物と人間が一体であると説く点で、神道の自然崇拝や「天人合一」の理念と親和性が高かった。これにより、陽明学は単なる外来思想にとどまらず、日本の「国家的精神」と結びつき、精神文化の基盤の一部を形成した。

3.2.2. 武士道との融合

陽明学は武士道に思想的深みを与えた。

忠誠心：個人の内なる「良知」に基づいて行動を起こすという陽明学の理念は、主君への忠誠と自己犠牲の精神を強化する方向に作用した。

死生観：武士道が重視する「死の覚悟」は、陽明学が説く「生死一念の超脱」と共鳴した。『葉隠』に見られる「武士道とは死ぬことと見つけたり」という精神は、生死の分別を超克することで自由な心と倫理的行動を実現するという陽明学的死生観と相通じている。

3.3. 朱子学との対立および折衷

江戸時代において、幕府が朱子学を官学として奨励したため、陽明学はしばしば体制批判的な思想として受け止められ、弾圧を受けることもあった。しかし、この抑圧こそが、陽明学が「反体制的実践哲学」としての性格を強化する契機となった側面も否定できない。もし幕府が陽明学を積極的に推奨していれば、それは朱子学と同様に秩序維持の道具となり、その実践性や革新性は失われていた可能性がある。皮肉にも、政治的弾圧が陽明学の行動哲学としての独自性を際立たせたのである。

また、陽明学と朱子学は常に排他的に対立していたわけではない。佐藤一斎のように両者を折衷する学者も存在し、両学派の知見を融合させた新たな思想的展開もみられた。このような思想的動態は、日本陽明学が単なる「対立」の産物ではなく、複雑な相互作用を通じて形成されたことを示している。

表 3：陽明学が融合した日本的価値観

日本的価値観	陽明学の概念との結びつき	特徴的な実践・思想
武士道	「知行合一」「致良知」	忠誠心・自己犠牲の精神 生死観の深化と確立
神道	「心即理」「万物一体の仁」	自然との一体感 天人合一思想 国家的精神文化の形成

4. 結語——日本陽明学の創造的転用と現代的意義

本研究は、中国において誕生した陽明心学が、日本という異文化圏に伝播し、独自の「行動の哲学」として再構築される過程を明らかにした。その受容の特質は、大きく三点に整理できる。第一に、中国の陽明学に見られる思弁的傾向を抑制し、徹底した実践性を志向する哲学として機能したこと。第二に、個人の内面に深く根ざした修養を通じ、身分や階層を超えた普遍的倫理を提示したこと。第三に、神道や武士道といった日本固有の価値観と融合し、思想の在地化に成功したことである。

この展開は、思想が異文化圏に移植される際に、いかにその文化的文脈に応じて変容し、新たな意味を創出し得るかを示す好例である。日本陽明学は、朱子学という支配的正統思想に抗しながらも、日本の社会構造や既存価値と結合することで独自の発展を遂げ、幕末の社会変革に顕著な影響を与えた。

さらに、日本陽明学が形成された歴史的背景は、現代社会の課題とも通底する。現代は、インターネットの普及により膨大な知識へのアクセスが容易になった一方で、その知識を実際の行動に結びつけられないというジレンマを抱えている。これはまさに、陽明学が朱子学批判において問題提起した「知」と「行」の乖離に通じる現象である。この観点からすれば、日本陽明学が展開した「行動の哲学」は、単なる歴史的遺産ではなく、現代社会が直面する普遍的課題への応答としての意義を有している。

陽明学の中核概念である「知行合一」や「致良知」は、今日においてもなお重要な示唆を与える。企業倫理やリーダーシップの領域においては、知識と行動の一致、そして誠実な実践が不可欠であることを再確認させる。また教育においても、知識の習得にとどまらず、それを社会において実践する力の涵養という課題に直結している。さらに、ストレスや孤独感を抱える現代人にとって、陽明学が説く内面的省察や心の安定は、精神的健康や自己成長に資する有効な資源となり得る。

このように、日本陽明学は歴史的文脈を超えて現代に通用する普遍的価値を持ち、今日の人間行動や倫理的規範を考察する上で重要な示唆を提供している。これは、陽明学が日本において創造的に在地化されたことの最も明確な証左である。今後の研究課題としては、陽明学の思想が現代日本の倫理思想や社会規範にいかなる形で潜在的影響を与えているのかを、より精緻に探究する必要があるだろう。

著者貢献

陳放は、本稿の構想、執筆および全体構成を独自に担当した。

倫理規範への適合

該当なし。

資金提供

なし。

利益相反

著者は、本稿に関連して経済的・人的・職業的利害関係を一切有していないことを宣言する。

謝辞

特になし。

参考文献

1. 日本神話と歴史. “陽明学とは？心即理・知行合一・致良知の説の考え方や危険性.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://rekishinoeki.org/youmeigaku/
2. リベラルアーツガイド編集部. “【陽明学とは】朱子学との関係や日本おける陽明学までわかりやすく解説.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://liberal-arts-guide.com/yangmingism/
3. 世界史の窓. “格物致知.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://www.y-history.net/appendix/wh0303-073_3.html
4. 藤樹書院. “中江藤樹ついて.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://toujushoin.com/touju.html
5. おかやま人物往来. “熊沢蕃山.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://digioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/person/kumazawabanzan/banzan-short.htm
6. WEB 歴史街道. “大塩平八郎の乱〜知行合一の陽明学徒が決起.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://rekishikaido.php.co.jp/detail/4969
7. 笹川陽平. “陽明学は死んだのか.” 笹川陽平ブログ（日本財団名誉会長）. 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://blog.canpan.info/sasakawa/archive/4188
8. 道谷内 悠. “現代のビジネスマンにとっても大切な考え方！吉田松陰も座右の銘にした『知行合一（ちこうごういつ）』とは？” note. 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://note.com/yuu_douyachi/n/nff99c271679d
9. 石田明. “武士の朱子学 庶民の陽明学.” 最終アクセス 2025 年 9 月 9 日. https://www.aidu.server-shared.com/~ishida-a/824nakaetouju.pdf
10. 李静. “「万物一体の仁」に関するひとつの再解釈.” 『社会システム研究』20 (2017): 71–90. https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/bitstream/2433/220432/1/soc.sys_20_71.pdf